

令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果 －分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について－

| | |
|-------|-------------|
| 区 名 | 平野区 |
| 学 校 名 | 大阪市立新平野西小学校 |
| 学校長名 | 松森 佳子 |

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和7年4月17日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数
- ・理科

(2) 質問調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・大阪市立新平野西小学校では、第6学年 42名

令和7年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

本年度の全国学力・学習状況調査における平均正答率は、国語科・算数科ともに全国平均を下回る結果となった。一方で、無回答率については全国平均よりも低く、児童が設問に対して意欲的に取り組んでいる様子が見える。

国語科では、「話すこと・聞くこと」の項目において全国平均を下回った。また、「書くこと」の項目でも、わずかではあるが全国平均に届かなかった。

算数科では、特に「データの活用」の項目で全国平均を下回ったが、「変化と関係」の項目においては全国平均に近づきつつあり、一定の成果が見られた。

児童質問紙の結果では、「将来の夢や目標を持っていますか」「人が困っているときは、進んで助けていますか」といった項目においては肯定的な回答の割合が全国平均および大阪府平均とほぼ同程度であり、児童の将来への意識や他者との関わりに対する姿勢が育まれている。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕

国語科では、14項目中11項目において全国平均を下回る結果となった。しかしながら、学習指導要領の「B 書くこと」に該当する項目においては、大阪市の平均正答率を上回る成果が見られた。

全国平均正答率を上回った問題としては、以下の3点が挙げられる。「C 読むこと」の項目における、「事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成全体を捉えて要旨を把握することができるかどうかをみる」問題と、「目的に応じて文章を図表などに結び付けて必要な情報を見つけることができるかどうかをみる」問題、「B 書くこと」の項目における、「書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落を作ったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることができるかどうかをみる」問題である。一方、大きく全国平均を下回ったのは、「言葉の特徴や使い方に関する事項」のうち、「学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができるかをみる」問題であった。また、全体的に平均無回答率は全国よりも低い傾向が見られた。これは、子どもたちが問題に対して真剣に取り組んだ結果であると捉えることができる。総合的に見ると、国語科や総合的な学習の時間、総合的読解力を育成する授業において、「目的に応じて文章と図表などを結び付けて必要な情報を見つけ出す力」が着実に伸びつつあることがうかがえる。

今後の課題としては、読書の時間などを活用して文脈の中で新しい語彙に触れさせ、単語の意味を深く理解・記憶させることが求められる。また、学んだ語彙を発表の場などで実際に使用させることにより、語彙の定着を図ることが重要である。

〔算数〕

算数科では、16項目中12項目において全国平均を下回る結果となった。全国平均との差が最も大きかったのは、「A 数と計算」の「棒グラフから項目間の関係を読み取るができるかどうかをみる」問題であった。一方、全国正答率を7.9%上回ったのは、「数直線上での1の目盛りに着目し、分数を単位分数のいくつ分として捉えることができるかどうかをみる」問題である。全体としては、無回答率が全国平均よりも低く、児童が積極的に回答しようとする姿勢が見られた。

しかし、「D データの活用」の「目的に応じて適切なグラフを選択し、出荷量の増減を判断した上で、その理由を言葉や数を用いて記述する力をみる」問題の正答率が低かったことから、グラフを正確に読み取る力、複数のグラフや表を比較する力、個別の数値だけでなく全体の傾向や特徴を捉えて言葉で説明する力を育てる必要がある。

記述式問題への対応力を高めるためには、算数に限らず他教科においても、「理由」や「なぜそう考えたのか」を短くても言葉にして説明する活動を繰り返すことが重要である。こうした取り組みの積み重ねが、表現力の向上につながると考える。

〔理科〕

理科では、17項目中16項目で全国平均を下回る結果となった。特に、「エネルギー」を柱とする領域の「知識・技能」を問う問題では、全国平均との差が最も大きかった。一方、「粒子」を柱とする領域の問題では、全国正答率を6.9%上回っていた。全体としては、無回答率が全国平均よりも低く、児童が積極的に回答しようとする姿勢がうかがえた。

今後は、図や実験の流れを覚えるだけでなく、「なぜそのような結果になるのか」という仕組みに着目しながら学習を進めることが重要である。また、実際に観察したり簡単な実験を行ったりすることで、体験を通して理解を深めることができる。さらに、ICT機器を活用してデジタルドリルや問題集に繰り返し取り組むことで、テスト形式にも慣れることができ、毎日少しずつ学習を積み重ねることで、知識の定着にもつながると考える。

質問調査より

児童質問紙の結果によると、「人が困っているときは、進んで助けていますか」という項目では肯定的な回答が93.0%、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」では95.3%と、いずれも全国や大阪府と同程度の結果となった。このことから、児童は思いやりや社会性の面で高い意識を持っていることがわかる。

一方で、「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強しますか」という質問では、「全くしない」と回答した児童が20.9%にのぼった。また、「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書しますか」という項目でも、37.2%の児童が「全くしない」と答えた。これらの結果から、児童が自分に合った学習方法を知り、家庭学習の習慣化を図ること、そして学習リズムが崩れにくい生活環境を整えることが必要であると考えられる。

さらに、PCやタブレットなどICT機器の活用に関するすべての項目で、本校の結果は全国平均を下回った。これを受けて、本校では本年度、「一人一台端末を活用した個別最適な学習の実現」を目標に掲げている。その実現に向け、授業ではタブレットや電子黒板を効果的に活用し、児童の思考を可視化するとともに、活発な意見交換や主体的な学びへとつなげる取り組みを進めていく。

今後の取組(アクションプラン)

本校では、今年度より図画工作科の研究において、「一人ひとりが表現の喜びを味わい、自信をもって表現する子の育成」をテーマに取り組んでいる。子どもたちの学習意欲を高め、「わかる授業」を実現するための一手段として、ICT機器の活用を進めているところである。調べ学習や発表活動に限らず、基礎的な技能や学力の定着にもICTを活用し、一人ひとりの学びをより深められるよう取り組んでいく。

また、児童が互いに認め合い、協力し合える人間関係を築けるような学習環境を整えるとともに、自尊感情の育成にも力を入れている。すべての子どもが自分らしく、自信をもって未来を切り開いていけるような教育の推進を今後も図っていく。